

外国人として生きる

芸術活動からの発信、京香一さん —日常化したフィリピン、パブリックなフィリピン

鈴木 伸枝 (すずき のぶえ)

千葉大学文学部教授

一九八八年秋、二〇歳を過ぎたばかりの京香一は、ニューヨークで「サラフィーナー」を観劇していた。「サラフィーナー」とは、南アフリカの人種隔離政策に反対する若者たちを描きトニー賞に輝いたミュージカルのことである。

一九九〇年に「サラフィーナー」の日本公演がおこなわれたとき、芸術学部の学生だった京は、ツアーカンパニーに行ける機会をえ、出演者や関係者と交流することで大きな影響を受けた。それから八年後、京は自らのプロジェクトを立ち上げ、多国籍の出演者が日本語と英語で交互に出演する舞台を製作した。

日比混在の家庭

京は、「フィリピン人の母と日本人の父のあいだに生まれた。幼児のときにカトリックの洗礼を受け、日曜日には教会のサンデースクールに通っていた。理由はいえ、単純に「お菓子が楽しかったから」という記憶しかないが、そんなクリスマス活動でも日曜日に教会に通うことで、学校でいじめにあうことはなかった。また、京には「マイケル」というクリスマスチャン名があったが、母はマイケルとよぶこともあまりなく、「香ちゃん」として育った。そんなわけで、自分が周囲とは異なるということとはほとんど感じたことはない。

父親が仕事でフィリピンに駐在していたこともあり、家庭では多言語が使用され、父と姉二人は英語のほかにフィリピンのセブアノ語とタガログ語が話せる。けれども、京は英語は「耳で習っただけのブローケン」で、フィリピン語は聞いてなんとなくわかるが話すことはできない。家庭では母の作るフィリピン料理で育つが、それを母の国の料理だと意識することは全くなく、「家のごはん」だと思っていた。大学に入り、友達と入った回転寿司の店で初めて「すし」というものを食べたそうだった。この大学生活も、「たまたま受かっちゃったから日本の大学に行った」けれども、「もし受験に失敗していたら姉同様フィリピンの大学に通っていた」そうだった。

衝撃から生まれた多国籍ミュージカル

京は「フィリピン人」としての明らかでないアイデンティティをもっていたわけではないが、それにちよつとした変化をもたらし、自分が「サラフィーナー」だった。ただし、自分がフィリピン人であることに目覚めたという意味ではない。むしろ、日本にいながら他の日本人にフィリピンやその他の民族の存在を意識させたり、多様な文化の良さを伝えてみようとするきつかけになったという意味である。

「サラフィーナー」を観たときの衝撃を京はすぐには表現することができず、二年ぐらいかけて劇のメッセージを理解しようと努めたという。当時所属していた劇団での活動を「生ぬるい」と感じて去り、自分で何ができるのか模索し始めた。

一九九六年、京は International Cross-Culture Project (ICCP) という企画制作を立ち上げる。最初にてがけたのが、バイリンガル劇『Once on This Road』だった。これは、やはりトニー賞を受賞したリン・アレンズ原作のカリブ海アンティル諸島における植民地の差別や階級意識が溢れる人間関係を描いたミュージカルである。京は、この作品にスペイン統治下のフィリピンの状況と同様のものを感じ取り、それを原作に重ね合わせるミュージカル製作を試みた。

配役に選んだのは、大学時代共に演劇を志したもののやプロの日本人役者もいたが、多くは非常に高い演技力や歌唱力を有しながら、一般にはあまり知られていない在日フィリピン人たちだった。京は、少しでもアジア系あるいは非白人系タレントが、その力を発揮できる場を作り出し、また、同じキャストによる日本語と英語の公演が交互におこなわれるという、極めて稀なミュージカルを演出してみせた。小さな劇場で二日間だけの公演であったが、京の心のなかではこう

挫折、そして夢

京はフィリピンを中心とした東南アジア文化を意識しながら、その文化のポジティブな紹介を試みてきたが、それが裏目に出たこともある。あるコン

サート・イベントにおいて、協力者だと思っていた女性に、売り上げを着服されるといふ苦い経験もしている。アジア人の負のステレオタイプを少しでも払拭しようとした試みで裏切られた経験は悔しく、人間不信に陥った。イベントに

かかった経費がさらに京の肩に重くのしかかった。

これに責任を感じた京は、勤めていた会社を辞し、イベント制作会社に移った。舞台のような派手さはないが、地域のイベントで食べ物やクリスマス、多様な工スニックドレスなどの文化紹介をとおし「フィリピンのイメージアップ」をおこなっている。また、今年の四月からは、千葉市の公営ホールで企画広報の仕事に携わる。千葉市はフィリピンのケソン市と姉妹都市だが、ホールでの催しは国内のテーマに集中することが多く、あまり海外の文化に興味がないことが少々物足りない。仕事を始めたばかりの今は与えられた仕事をこなすことを優先し、そのなかで自分なりの考えや経験を反映していければラッキーだと考えている。

京は、「普段の生活で自分がフィリピン人だということを意識したことは残念ながない」という。しかしそれは、「自然に母がいつもそこにいて、そういうものだ」というかたちでフィリピン文化に触れ、取り込んできたからでもある。現在では自らがディレクターとして何か企画制作できるチャンスを持っている。彼は、フィリピンや他の国の人とさらに交流し、「世界の色々な優れた舞台や小説なんかを紹介したり、再びICCPで芸術作品をプロデュースしたい」という夢とチャレンジは、今も密かに温め続けている。

フィリピンをはじめ多様な人びとの交流を通じて、その文化紹介を目指している京香一さん(2008年 筆者撮影)



日本・フィリピン友好年の2006年、京香一さんプロデュースにより宇都宮の商業施設で開催されたイベントの様子(写真提供 京香一)

